

英語音声(/p/, /b/, /f/, /v/)の日英対照による効果的な発音指導法
 ——岩手大学教育学部「英語音声学講義」における授業実践——

犬塚 博彦

1. はじめに

本稿は、筆者が岩手大学教育学部の英語音声学の講義において行なっている日英対照による英語音声の発音指導法の中から、唇音(/p/, /b/, /f/, /v/)に関するトピックを取りあげ、はじめて音声学を学ぶ学生たちを対象に、日英両言語の音声の特徴をふまえた上で、わかりやすい言葉でしかも効果的に発音指導をするにはどのような方法が適切かということについて考察することをその目的とする。

英語音声学は、学生たちが大学に入ってから初めて体系的に学ぶことになる学問領域であり、しかもその性質上なかなか独習が困難な分野である。岩手大学教育学部においては、英語音声学は学校教員養成課程中学校教育コース英語科の科目として、「英語音声学講義」（1年次後期）と「英語音声学演習Ⅰ・Ⅱ」（それぞれ2年次前期・後期）が開講されている。このうち「英語音声学講義」は、多くの学生たちにとっては学問としての音声学に初めて接することになる科目として位置づけられているので、講義担当者としては、いかにわかりやすい言葉でしかも本質をとらえた的確な表現を用いて学生たちを音声学の世界にいざなうかということに細心の注意を払うことになる。

ところで、英語音声学を学びはじめる学生たちにとっては、英語を英語らしく発音するコツを学びたいという実践的な目的を持っていることが多いのであるが、大学の授業用に作られている英語音声学のテキストの多くは、厳密さが要求される学問領域であるがゆえ、音声器官や音の種類などに関する術語の数がおびただしく、音声学を学び始めたばかりの学生たちにとっては、それらを理解して十分に使いこなせるようになるまでにはある程度の時間が必要となることもあって、場合によってはこうしたことが音声学の世界に対する心理的なハードルとなってしまうこともまた考えられる。

そこで筆者の「英語音声学講義」では、テキストにあらわれる術語や概念を説明する際には、必要に応じて、できるだけ平易でしかも本質をとらえた言語表現を用いてそれを補うことを試み、それを実践している。講義の中でそれぞれの音声の調音のしかたについて説明をする際には、学生たちが授業の中で説明を受け、ノートに書きとめた言葉の通りに実際に自分の調音器官を動かしてみたら、まさにその音声が生産されるのみならず確認できるような具合になるようにと、そ

の言語表現にはいろいろと工夫を凝らしている。

以下において、唇音(/p/, /b/, /f/, /v/)に関するトピックのうちのいくつかを取りあげ、英語音声学を学び始めたばかりの学生たちに、わかりやすい言葉でそれぞれの音声の調音法を説明する時の言語表現を吟味し、日英対照の適切な例を示しながらの英語音声の効果的な指導法について考察していくことにする。なお、本稿で言及する「テキスト」とは、筆者が平成 14 年度後期の「英語音声学講義」で使用した竹林&斎藤(1998)を指すものとし、この他に筆者が以前にテキストとして使用したことのある竹林他(1991)をも適宜参照することにする。

2. 唇音(/p/, /b/, /f/, /v/)の効果的な発音指導法

2. 1 考察の対象

唇音(labial)は、その調音位置の区分から両唇音(bilabial)と唇歯音(labiodental)とに分けられる。このうち本稿では、その調音様式が閉鎖音および摩擦音となるものみに考察の対象を限定することにする。したがって本稿で考察の対象となるのは、日本語と英語それぞれに音素として関わる無声および有声の両唇閉鎖音(/p/, /b/)、英語のみに関わる無声および有声の唇歯摩擦音(/f/, /v/)である。また、日本語のみにあらわれる音声として「フ」の子音部分すなわち無声両唇摩擦音[ɸ]についても、英語の/f/音との比較において考察することにする。

2. 2 「閉鎖音」と「摩擦音」を説明する時の言語表現

本節では、具体的な個々の音声の調音法について検討するのに先立って、本稿で考察の対象とすることにした調音様式である閉鎖音および摩擦音について、講義の中で説明をする際のその言語表現について吟味することにしたい。考察の手順としては、まずそれぞれの用語がテキストでは実際にどのような言語表現で定義され説明されているのかを調べ、もしそこに音声学を学び始めたばかりの学生たちにとってわかりにくいと思われる部分が見出されるとすれば、本質を見失わない範囲で他にどのような表現で言い換えることが可能であるかということについて検討していくことにする。

まず、閉鎖音については、竹林&斎藤(1998:11)では「声道のどこかで呼気の流れが完全に閉鎖され、その閉鎖ないし開放の際に調音される音」と定義されている。また竹林他(1991:76)では「声道のどこかで呼気の流れが完全に閉鎖され、それを呼気が吹き開けるときに生じる音」という表現になっている。音声学を学び始めたばかりの学生たちにとってできるだけ違和感のないようにという配慮から、講義で説明する際に筆者は、テキストの中にあられる「呼気」という言葉

を「肺からの空気」という表現で補い、「声道のどこかで」の部分で「口の外に出るまでに、口の中のどこかで」という表現に言い換えることにしている。また、テキストでは「閉鎖」音の定義をする言語表現の中で「閉鎖され」という同一の言葉を使っているのであるが、これも何となく気が引けたので、筆者は「さえぎられる」という別の言葉に言い換えることにしている。こうした点をふまえて筆者は、閉鎖音を講義の中で説明する際には、以下の表現を使うことにしている。

(1) 閉鎖音を説明する時の言語表現

閉鎖音とは、肺からの空気が、口の外に出るまでに、口の中のどこかで、その流れが完全にさえぎられて出される音である。

次に、摩擦音に関しては、竹林&斎藤(1998:11)では、摩擦音とは「声道のどこかで狭窄が起り、呼気がこの狭窄の間から押し出されるときに生ずる摩擦の音を伴う音」と定義されている。また竹林他(1991:77)では「声道のどこかで2つの調音器官が接近して狭いすき間をつくり、呼気がそのすき間を通過するとき摩擦が起こって生じる音」という表現になっている。このうち竹林&斎藤(1998:11)では「狭窄」という言葉が使われているのであるが、学生たちにはあまりなじみのない言葉であると思われるので、筆者は「わずかなすき間」という表現に言い換えることにしている。また「呼気がこの狭窄の間から押し出される」という表現も少しかたい言い方であると思われるので、筆者は「わずかなすき間を、肺からの空気がすり抜ける」という表現で言い換えることにしている。また、テキストでは「摩擦音」の定義をする言語表現の中に「摩擦の音」という同一ともとれる言葉を使っているのであるが、これも少し気が引けたので、筆者は「こすれたような音」という別の言葉に置き換えることにしている。こうした点をふまえて筆者は摩擦音を講義の中で説明する際には、以下の表現を使うことにしている。

(2) 摩擦音を説明する時の言語表現

摩擦音とは、口の中の上下の調音器官が近づいてわずかなすき間がつくられ、そのわずかなすき間を、肺からの空気がすり抜ける時に生じるこすれたような音である。

2. 3 /f/音と/v/音の調音方法を説明する時の言語表現

本節では、先に示した唇音のうち、日本語にはなく英語のみに関わるものとして、無声および有声の唇歯摩擦音(/f/, /v/)を取りあげて、授業の中でその調音方法について説明を行なう際のわかりやすい言語表現について考察してみることにした。

まず/f/音についてであるが、竹林&斎藤(1998:92)では「上の前歯の先が下唇の内側に軽く触れ、両者の狭いすき間から呼気が押し出され、その間声帯は振動しない。」と説明されている。また竹林他(1991:89)では、「上の前歯の先に下唇を軽くあて、両者の狭いすき間から息を出す。この間、声帯は振動しない。」という表現になっている。一方/v/音については、竹林&斎藤(1998:93) および竹林他(1991:90)のどちらも同じ表現で「/f/に対応する有声唇歯摩擦音」とだけ記されており、無声音に対する有声音の記述はごく簡潔な表現にとどめられていることがわかる。表現の余剰性を排し、知識を整理するという目的としてはこれで差し支えないのであるが、その一方で、講義では、学生たちが調音法の説明をたどりながら、実際に心の中にその調音の情景がありありと浮かび、しかもその音の印象までもが耳に聞こえてくるような形でのわかりやすい表現の仕方もまた必要となってくるのではないかと考えられるのである。

こうした点をふまえて筆者は、講義の中で/f/音と/v/音の調音方法を説明する際には、以下に示すような言語表現を用いることにしている。

(3) /f/音と/v/音の調音方法を説明する時の言語表現

/f/= 「上の歯を下くちびるに軽くあてて『フッ』と息を出す」

/v/= 「上の歯を下くちびるに軽くあてて『ヴー』と声を出す」

ここで(3)について少し説明を加えておくことにしたい。まず、「上の歯を下くちびるに軽くあてて」という表現についてである。/f/音と/v/音は実際の調音では竹林他(1991:89)にあるように、調音器官の動きとしては「上の前歯の先に下唇を軽くあて」る形になるのであるが、授業での説明の際に筆者は、学生たちにとって、より感覚的にわかりやすいと思われる「上の歯を下くちびるに軽くあてる」という表現を便宜上使うことにしている。これは、調音に際して学生たちの意識を上歯のほうに向けてもらい、日本語の「フ」の音とは明らかにその調音法が異なるということをしつかりと認識してもらうという意味合いを考えてのことである。また、下くちびるが接触するのは上の「前」歯であることは明らかであるので、筆者の授業での説明の際には、厳密さを一部欠くことにはなるが、単

に「上の歯」とだけ表現することになっている。

また、/f/音と/v/音の調音の違いは声の有無であることを発音練習の際にしつかりと認識してもらうために、筆者の授業では、無声音については「息を出す」という表現を使い、有声音については「声を出す」という表現を使うことにしている。つまり「息」と「声」のそれぞれの言い方でもって無声と有聲を使い分けるといふ心づかいである。

また、調音法を説明する際の表現としては、/f/音については「『フッ』と息を出す」という表現、/v/音に関しては「『ヴー』と声を出す」というようにカナも適宜取り入れて感覚的にとらえやすいように配慮している。

2. 4 日英対照の観点からの発音指導法

前節では、英語の/f/音と/v/音について、それぞれの調音のしかたを説明する際の言語表現について論じてきたが、ここでは日英対照の観点から、日本語を母語とする英語学習者にとっては類似した聴覚的な印象をもつと思われる日本語の/b/音と英語の/v/音について、その調音上の違いを確実に把握できるような発音練習法とその手順について考察していくことにする。

2. 4. 1 日本語の/b/音と英語の/v/音：「ビュー」と“view”を例にして

/b/音は有聲両唇閉鎖音であり、/v/音は有聲唇歯摩擦音であって、両者は調音位置も調音様式も本来異なるものであるが、日本語を母語とする英語学習者にとっては、慣れないうちは、/v/音を無意識のうちにバ行の[b]音に置き換えて発音してしまうことも十分に考えられる。また/b/音も/v/音も共に有声音であるために、声帯が振動する時の音の影響により、両者の聴覚上の違いを感覚としてつかむにはある程度のコツが必要となる。そのためにはまずは学習者自身が/b/音と/v/音を正確に調音し分ける練習をすることから始め、その聴覚上の違いをみずからの耳を通して感じ取るという順序で進めていくのが適切であると考えられる。そこで筆者の授業では、日英対照の観点から、発音練習のための一つの素材として「ビュー」と“view”という2つの語（もしくは音連続）を取りあげて、次に示すような手順での発音指導を展開している。

「ビュー」[bjɯ:]と“view”[vju:]について、日本語を母語とする英語学習者にとってその聴覚上の違いが識別しにくいと感じられるのは、先に触れたように語頭の/b/音と/v/音がともに有声音であるのがそのおもな要因として考えられるのであるから、閉鎖音と摩擦音の調音方法の違いを学生たちに理解してもらうために、筆者の授業では発音練習の手順として、まず一旦これを無声の音に直し

て両者を交互に繰り返し発音してもらい、その時の調音の感覚の違いをつかんでもらうという方法をとっている。/b/音に対する無声音は/p/音、/v/音に対する無声音は/f/音であることから、ここにおいて「ピュー」[pjɯ:]と“few”[fju:]という2つの語（もしくは音連続）が発音練習用の素材として新たに設定されることになる。これによって声帯の振動による声の部分を取り除かれるために、聴覚的にはかなりすっきりした印象になる。このうち、日本語の/p/音の調音法については特に詳しく説明するまでもなく、両唇閉鎖音として上下の唇が一度完全に閉じることが確認できればよい。また、英語の/f/音の調音法については、2.3ですでに論じたように、「上の歯を下くちびるに軽くあてて『フッ』と息を出す」という言葉の通りに実際に調音器官を動かしてみればよいのであるから、それぞれ一旦無声音に直した上で/p/音と/f/音の対においては、その調音上の区別は学習者にとってさほど困難ではないと考えられる。

ところで筆者の授業では、閉鎖音(/p/)と摩擦音(/f/)の調音上の違いを、より確かなものとして学習者につかんでもらうために、次のような方法をとっている。すなわち、「ピュー」[pjɯ:]と“few”[fju:]のそれぞれの語頭の子音部分をあえて意識してゆっくりと引き延ばして語全体を発音してもらい、その時の調音の具合を各自で確かめてもらうという方法である。「ピュー」における/p/音の場合は閉鎖音であって、その開放は瞬間的であることから、開放した時の構えのまままで無理にこれを引き延ばそうとすると、後続する母音の調音の構えが必然的に入ってくることになる。これに対して“few”における/f/音は摩擦音であるがゆえ、その調音時の構えをその状態のまま長く引き延ばすことができるのであるから、この点を踏まえて「ピュー」[pjɯ:]と“few”[fju:]を交互に繰り返し発音してもらうことによって、閉鎖音と摩擦音の違いを学習者に感覚としてつかんでもらうことがより容易となるのである。

さてここまでの手順をたどれば、“few”[fju:]における/f/音の調音法が確かなものになったはずであるので、次の段階では、これまで一旦無声音に直してとらえていた語頭の/f/音を再びもとの有声音(/v/)に戻すことにする。ここにおいて“few”[fju:]と“view”[vju:]というミニマルペアが発音練習用の素材として用意されることになり、この両者を交互に繰り返し発音してもらうことによって、無声と有声の調音法の違いを学習者に感覚としてつかんでもらうことが容易となるのである。声帯の振動の有無に関しては、両手を両耳に軽くあてながら調音するか、あるいは指先を喉仏のところに軽くあてながら調音するかのいずれかの方法をとればそれを擬似的に確認できるため、筆者の授業では、学生たちにはこの方法により声帯の振動の有無を確認する際の手がかりとしてもらっている。

ここまでの手順をたどることにより“view” [vju:]における/v/音の調音法が確かなものになったはずであるので、この“view” [vju:]と最初に提示した「ビュー」 [bjɯ:]を学習者に繰り返し交互に発音をしてもらうことにより、/b/音と/v/音を正確に調音し分けることが可能となるのである。以上の手順をまとめると次のようになる。

(4) 「ビュー」 [bjɯ:]と“view” [vju:]の発音練習の手順

- ① 一旦無声に戻しての閉鎖音と摩擦音の識別： 「ビュー」 vs “few”
- ② ミニマルペアを用いての無声音と有声音の識別： “few” vs “view”
- ③ 有声音どうして摩擦音と閉鎖音の識別： “view” vs 「ビュー」

2. 4. 2 日本語の[ɸ]音と英語の/f/音：「風土」と“food”を例にして

2. 4. 2. 1 学習者にとっての[ɸ]音の位置づけ

日英対照の観点からの発音指導法として、前項では日本語の/b/音と英語の/v/音について論じてきたが、本項では、日本語の「フ」の子音としてあらわれる無声両唇摩擦音[ɸ]について、英語の/f/音との対照において考察しておくことにする。

筆者の授業では、英語の/f/音と日本語の「フ」音の調音上の違いを学習者に理解してもらうための一つの素材として「日本語の『風土』と英語の“food”はその発音がどう違うか？」というテーマを設定している。

日本語の「フ」の子音について授業の中で取りあげる際に、音声学を学び始めたばかりの学生がおそらくこれまであまり見たことがないと思われる[ɸ]という記号を、何の前触れもなく提示するのはあまり賢い方法とは言えないと筆者は判断しているので、学生たちには「風土」という言葉の語頭の子音部分を注意深く発音してもらって、調音の際に口の中のどの部分がどのようになっているのかをまずはそれぞれ感じ取ってもらうことにしている。そうして、上下のくちびるが近づいて発音されるということに気づいた段階で、今度は国際音声字母(IPA)の表を前にして、その時の調音の構えを的確に表わす音声記号を探し出してもらうのである。学生たちは、調音に際して、上下のくちびるが関わるのであるからその調音位置は「両唇」であり、それらが互いに近づいてわずかなすき間ができている状態であるから調音様式は「摩擦」であり、調音の際に声は出ていないのであるから「無声」とあるという判断をし、そこからIPAの表に目をやり、子音の部分を上から下へとたどりながら[ɸ]という音声記号を見出すことになる。これは、発音する時に普段はあまり意識することのない口の中の調音器官の動きをみ

ずから感じ取ってもらい、それを IPA の表を使って音声学的な観点からみずから位置づけるという学びのプロセスそのものをあらわしている。

さて、この無声両唇摩擦音 [ɸ] の調音法を授業の中で説明する際には、筆者は「上下のくちびるを近づけて『フッ』と息を出す」という表現を使うことにしている。ここで、先ほど (3) で示した /f/ 音の説明とあわせて (5) として以下にまとめておくことにする。

(5) [ɸ] 音と /f/ 音の調音方法を説明する時の言語表現

[ɸ] = 「上下のくちびるを近づけて『フッ』と息を出す」

/f/ = 「上の歯を下くちびるに軽くあてて『フッ』と息を出す」

2. 4. 2. 2 「風土」と “food” の発音練習をめぐって

「風土」と “food” は音声記号ではそれぞれ [ɸm:do] および [fu:d] と表記され、ここでの一番の論点となる語頭の [ɸ] 音と /f/ 音の調音上の違いは前項において触れたとおりであるが、この素材はまた、語中および語末の各音声についても学習者に日英の音声上の違いを認識してもらう上での格好のテーマを提供してくれるものでもあるため、その発音指導法をも含めて少し補足しておくことにしたい。

まず、「風土」 [ɸm:do] と “food” [fu:d] における第二音の母音の [m:] と [u:] についてであるが、発音指導にあたっては、前者が非円唇、後者が円唇であることに学習者の注意を向けってもらう必要がある。調音の際に唇のまるみを伴うか伴わないかを確認する手段として、唇の両側に親指と人差し指をあてて発音してもらうのが効果的である。筆者の授業では、日本語の「風土」 [ɸm:do] における [m] 音が非円唇であることを学生たちに確認してもらうために、非円唇であるということを疑う余地のない「イ」音をその前にもってきて「いい風土」 [iiɸm:do] という音連続を発音練習用の素材として使用している。その手順としては、まず、前半部「いい」 [ii] の部分を調音してもらう時に、唇の両側に親指と人差し指をあてて、唇の形が平らである状態を感覚としてつかんでおいてもらう。次に、再び唇の両側に親指と人差し指をあてながら、今度は「いい風土」 [iiɸm:do] と続けて発音してもらう。そうすると途中の [iiɸm:] までは親指と人差し指の間隔に変化がないことが確認でき、[m:] の部分が [i] 音と同じ唇の形、つまり非円唇であることが確かなものとして理解できることになる。一方、英語の “food” [fu:d] における第二音の母音 [u:] の発音練習にあたっては、あえて意識して唇をまるくして発音するように指導し、日本語の [m] 音のような非円唇にならないように注意を喚起する必要がある。この英語の [u:] 音の発音練習の場合も、

親指と人差し指を唇の両側にあててもらい、唇の形としてはデフォルトの非円唇の状態から円唇の状態へと移行する様子を指の動きによって確かめてもらうとより一層効果的である。

この他、「風土」[fuu:do]と“food”[fu:d]の語末部分の音構造の違いについては、日本語が母音で終わる開音節であり、英語が子音で終わる閉音節であって、母音で終わる日本語の発音習慣を英語に持ち込まないように注意を喚起する必要があるが、これは多くの入門書で発音指導上の注意点としてすでに触れられている内容であるので、ここではそのトピックの提示をするだけにとどめておくことにする。

3. おわりに

以上本稿では、大学で初めて英語音声学を学ぶ学生たちを対象に、英語を英語らしく発音するコツをわかりやすい言葉を用いて説明をし、しかも日英両言語の音声的特徴が浮き彫りになるような形で効果的に発音練習ができるような手順とその方法について、岩手大学教育学部において筆者が担当している「英語音声学講義」での実践例を踏まえながら考察を行ってきた。

本稿で論じたように、筆者の授業の中で、それぞれの音声の調音法を説明する際にその言語表現や発音指導の手順にさまざまな工夫を凝らしているのは、第一義的には、大学で音声学を学び始めたばかりの学生たちを無理なく音声学の世界にいざない、日英対照の観点から英語の音声的特徴を理解し、そして英語を正しく発音するコツをみずから身につけてもらうことにある。しかしまたその一方で、教育学部における英語音声学の授業でもあるので、教員養成としての視点から、学生たちが将来、英語教師として教壇に立って授業を行なうことになった時に、目の前の高校生や中学生（あるいは場合によっては小学生）に発音指導をする際にも、何らかの形で応用できるようなヒントを提示するという意味合いもそこに含めているのである。本稿では/p/, /b/, /f/, /v/に関するトピックを中心にあげたが、これ以外のものについてはまた別の機会に論じてみたいと考えている。

参考文献

- 亀井孝他(1996)『言語学大辞典第6巻術語編』,三省堂,東京。
 川上繁(1977)『日本語音声概説』,おうふう,東京。
 島岡丘(1986)『教室の英語音声学Q&A』,研究社出版,東京。
 竹林滋(1996)『英語音声学』,研究社,東京。
 竹林滋,斎藤弘子(1998)『英語音声学入門』,大修館書店,東京。

- 竹林滋, 渡邊末耶子, 清水あつ子, 斎藤弘子(1991) 『初級英語音声学』, 大修館書店, 東京.
- 安井泉(1992) 『音声学』, 開拓社, 東京.
- Baker, Ann. (1982) *Introducing English Pronunciation*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Crystal, David (1997) *A Dictionary of Linguistics and Phonetics*, Blackwell, Oxford.
- O' Connor, J. D. (1967) *Better English Pronunciation*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Roach, Peter (2000) *English Phonetics and Phonology*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Trask, R. L. (1996) *A Dictionary of Phonetics and Phonology*, Routledge, London.

(岩手大学教育学部英語教育講座)